

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 31日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009～2012

課題番号：21242016

研究課題名（和文） 近代世界におけるジェノサイド的現象に関する歴史学的研究

研究課題名（英文） Historical research on genocidal phenomena in the modern world

研究代表者

石田 勇治（ISHIDA YUJI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30212898

研究成果の概要（和文）：

本研究でいうジェノサイド的現象とは、国際法上の定義を超える「広義のジェノサイド」を意味し、人間の普遍的価値を否定し、特定集団を破壊する行為をさす。それはいくつかの複合要因によって惹起し、政治的社会的過程を通して急進化する。この現象が近代世界で頻発する背景には近代の諸原理が内包する両義的な性質がある。民族自決や国民国家の形成、植民地主義と脱植民地化、科学と技術の進歩は、ジェノサイド的現象の発生を阻害すると同時に、助長してきたのである。

研究成果の概要（英文）：

In our research project, we examine not only the typical cases of genocide, but also cases excluded by the UN definition. Genocide, in either the narrow or the broader sense, is a product of human agencies assaulting universal human values. It follows a certain social and political process that is facilitated, triggered, and escalated by particular factors. Therefore, the reasons behind the occurrences of genocide in the modern age should be investigated within a specific historical context. Modernity characterized by the progress in technology and science, development of the nation state and nationalism, establishment of colonialism and its reconfiguration etc has proven to be double-edged swords that can either hinder or facilitate genocide.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	8,900,000	2,670,000	11,570,000
2010年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2011年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
2012年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
年度			
総計	27,800,000	8,340,000	36,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：ジェノサイド、ジェノサイド予防、民族浄化、ホロコースト、近代、国民国家、レイシズム、植民地主義、過去の克服

1. 研究開始当初の背景

欧米の歴史学では 1990 年代にホロコースト（ナチ・ドイツのユダヤ人虐殺）に関する研究が飛躍的に進捗し、2000 年頃から非ヨーロッパ地域をも対象とする比較ジェノサイド研究が始まった（Robert Gellately/Kiernan, *The Specter of Genocide*, 2003）。日本でも戦争犯罪を含むマスキリングを主題とする松村高夫・矢野久（編）『大量虐殺の社会史』（ミネルヴァ書房）が刊行され、国家的不法暴力についての研究は厚みを増しつつある。しかし、ジェノサイドとそれに準じる現象が近代国家体系や近代諸科学とどのように関わり、いかなる歴史的な条件下で頻発し大規模化したかについて、世界史的な観点から包括的に捉える研究はいまだ存在しない。

本研究代表の石田勇治は、これまで科研・基盤研究（C）（平成 14～16 年度）「比較ジェノサイド研究—第二次世界大戦下ヨーロッパの事例から」に従事し、さらに日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」（平成 15～19 年度）の研究グループ「ジェノサイド研究の展開」の代表としてジェノサイドの様々な事例研究と分析枠組みの構築に取り組んできた。そのなかで近代の諸要素がはらむジェノサイドの契機の重要性を認識し、これらがジェノサイドの頻発にどう関与しているのか、逆に言えば、近代に発展した民主主義と人権の理念はなぜ悲惨な大量殺戮を抑制しえなかったのかについて、歴史的な立場から問い直す本研究を構想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は「文明と民主主義」の時代と言われる近代、とくに 20 世紀になってジェノサイド（集団殺害）とそれに準じる現象が世界各地で出来するに至った歴史的な要因を探求すべく、国民国家、レイシズム（人種主義）、優生学など、「近代」の懐から生じた新たな包摂と選別・排除の論理がこの事態といかに関係したかについて、歴史学の観点から検討を加えるものである。

具体的には、帝国主義列強による先住民虐殺、オスマン帝国でのアルメニア人虐殺、第二次世界大戦下ヨーロッパでのユダヤ人虐殺・ロマ人虐殺、旧ソ連・モンゴル・中国・カンボジアなど社会主義体制下での政治的暴力、独立後のアフリカ諸国での民族虐殺な

どを取り上げ、それぞれの政治的・経済的・社会的な背景要因をマクロ・レベルで比較分析する。これと並行して、ジェノサイドの現象を引き起こすイデオロギーと正当化の論理、「敵」の表象、ジェノサイド実行の動因とメカニズム、被害・加害関係のあり方などマイクロ・レベルの実態を解明し、併せて近代世界で頻発するジェノサイド的現象の普遍のおよび個別的な特質を解明する。

上記の趣旨に照らして、マクロ・レベルで問われるべき主要な論点は、①国民国家の形成と民族自決、②近代諸科学と「生命政治」（bio-politics）、③全体主義体制と法、④植民地支配とその遺制、⑤近代における戦争の変容、⑥国際システムの機能、の 6 つである。さらに、ジェノサイドの現象をマイクロ・レベルで解明すべく、各事例の当事者すなわち被害者・加害者・協力者・傍観者・遺族などが遺した史資料（官憲資料、裁判記録、証言記録、日記、手紙、手記、回想録など）を蒐集・分析すると同時に、文化人類学者・地域研究者の協力を得て、存命中の関係者への聴き取り調査を行い、その成果のデータベース化を行う。

3. 研究の方法

本研究でいうジェノサイド的現象とは、国際法（国連が 1948 年に制定した「ジェノサイド条約」）上のジェノサイドの定義—「国民的、民族的、人種的または宗教的な集団の全部または一部を集団それ自体として破壊する意図をもって行なわれる」殺害などの行為—に合致する事例に、この定義から外れる政治的・社会的集団に対する破壊行為、実行者が恣意的に定義・特定する集団に対する破壊行為、集団の破壊を意図する民族浄化（強制移住）など、近年のジェノサイド研究が提起する「広義のジェノサイド」の事例を加えたものである。（ただし、明らかに戦闘行為として行われた大量虐殺は、焦点の拡散を避けるためここでは扱わない。）

本研究では、前頁に記載した【A】マクロ・レベル①～⑥、【B】マイクロ・レベル①～⑤の計 11 課題に取り組む。マクロとマイクロの 2 つのレベルの研究は相互に補完し、フィードバックすべく設計されている。すなわちマクロ・レベルの課題に取り組むことで得られる「近代世界とジェノサイド的現象」の歴史的関係に関する理解は、マイクロ・レベルでの聴き取り調査によって得られた知

見と照合することで補強され、必要な修正の契機を得ることができる。一方、マイクロ・レベルの成果はマクロ・レベルの研究を媒介して事例間の比較研究を可能にし、併せてそれぞれの事例を世界史的な文脈に位置づけることができる。

研究体制は、歴史学（西洋史・東洋史・日本史）・地域研究・文化人類学の各分野で本研究について実績のある研究者を糾合して構築する。参加研究者は、対象地域別に6班に分かれるが、研究は成果を全体で共有しながら進める。各人はマクロ・レベル、ないしマクロ、マイクロの両レベルで研究を行い、その成果を【A】【B】を別々の、またはひとつの主題として実施する半年毎の研究集会で発表し、全体で検討を加える。マイクロ・レベルではデータベース化を行なう。

4. 研究成果

研究期間を通じて、近代世界に生じたジェノサイドの多様な事例をとりあげ、その政治的・経済的・社会的・文化的な背景要因と実態を比較検討し、ジェノサイドの動因やメカニズムの究明に取り組んだ。さらに、ジェノサイド後の社会再建や予防システムの構築についても追究した。

それらの研究成果については、研究雑誌、図書の他、国内外の多くの学会・シンポジウム等で公表している。主要なものとしては、代表者・石田が武内進一と編集した『ジェノサイドと現代世界』（勉誠出版）の公刊がある。本書は「ジェノサイド研究への視座」、「ジェノサイドの事例研究」、「ジェノサイド予防」の3部で構成され、本科研分担者・協力者の中間的成果を中心に、17本の論文を集めたジェノサイドに関する日本初の本格的な研究書となった。これと並行して『ジェノサイド事典』（概念篇・事例篇の全2巻）の編集作業にも取り組んだ。口頭発表としては、日本平和学会・分科会「ジェノサイド研究」で本科研メンバーが報告を行った。また、2012年6月のジェノサイド研究者国際ネットワーク（INoGS）第3回世界大会（サンフランシスコ州立大学）においては、本科研メンバーが、「ジェノサイド予防と日本の役割」と題するセッションを担い、成果の一部を報告した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

- ① Yuji Ishida, Taking a Step Forward for 'Sustainable' Genocide Prevention: Genocide Research in Japan, Comparative Genocide Studies、査読無、

3巻、2013、26-29

- ② 穂山洋子、スイスのホロコースト関与とその後、石田勇治・川喜田敦子編『現代ドイツへの視座—歴史学的アプローチ』、第2巻、勉誠出版、査読無、2013、掲載頁未定
- ③ 川喜田敦子、民族自決から民族浄化へ—住民移動から「ホロコースト」を考える、石田勇治・川喜田敦子編『現代ドイツへの視座—歴史学的アプローチ』第2巻、勉誠出版、査読無、2013、掲載頁未定
- ④ 吉村貴之、パンドラの箱～アルメニア人虐殺50周年記念追悼集会に関する史料公開、中嶋毅他『新史料で読むロシア史』、山川出版社、査読無、2013、277-295
- ⑤ Yuji Ishida, Overcoming the Past? The Postwar Japan and Germany, Han, Sang-Jin (ed.), Divided Nations and Transitional Justice: What Germany, Japan and South Korea can teach the World. Boulder, Paradigm Publishers、査読無、2012、146-159
- ⑥ 外村大、日本における朝鮮人危険視の歴史的背景—関東大震災時の朝鮮人虐殺の前提とその後、日本学、査読有、32号、2011、107-134
- ⑦ 石田勇治、ジェノサイド/ホロコースト人道への挑戦 アウシュヴィッツを考える、Peace Report (国際基督教大学平和研究所)、査読無、8-3巻、2011、6-7
- ⑧ 楊海英 (大野旭)、西部大開発と文化的ジェノサイド、中国 21 (愛知大学現代中国学会)、査読有、34巻、2011、117-134
- ⑨ 廣瀬陽子、グルジア紛争後の動向：新たな動きと変わらない現実、国際情勢 紀要、査読無、80巻、2010、269-287
- ⑩ 狐崎知己、現代グアテマラにおける政治暴力の変容、年報政治学、査読有、2巻、2009、87-107
- ⑪ 吉村貴之、アルメニア人虐殺をめぐる国際政治、民族紛争の背景に関する地政学的研究、査読有、8巻、2009、209-225

〔学会発表〕（計17件）

- ① Tomomi Kozaki, Decentralizacion y desarrollo rural: experiencias en Japon y Guatemala, SEGEPLAN、2012年7月31日、Guatemala City
- ② Yuji Ishida, Genocide Research in Japan: Taking a Step Forward for 'Sustainable' Genocide Prevention, The 3rd Global Conference on Genocide. The International Network of Genocide Scholars. Genocide: Knowing the Past, Safeguarding the Future、2012年6月30日、San Francisco State University,

- San Francisco, USA
- ③ Tomomi Kozaki, Perspectives of Latin American Studies in Japan, Latin American Studies Association, 2012年5月12日、San Francisco, USA
- ④ Yoko Hirose, “Complex Perspectives on Nagorno Karabakh: From comparative views between the Azerbaijanis and the Armenians”, The International Scientific Conference “The Place and Role of Caucasian Albania in the History of Azerbaijan and Caucasus”, 2011年12月1日、アゼルバイジャン・バクー、ヒルトンホテル (招待講演)
- ⑤ Yoko Hirose, “The Perspective on Peace-building of the Unrecognized States from the Comparative Point of View: Focusing on the situation of Azerbaijan and Georgia after 2008”, The Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), 2011 Convention, Session: 9-06 “Comparative Prospects for Peacebuilding in Black Sea Region Sovereignty Conflicts”, 2011年11月19日、米国・ワシントン DC、オムニ・シヨアムホテル
- ⑥ 楊海英 (大野旭)、中国文化大革命とモンゴル人大量虐殺事件—民族問題とジェノサイドの関連性、ワークショップ「ジェノサイド研究の展開」(科学研究費補助金・基盤研究(A)「近代世界におけるジェノサイド的現象に関する歴史学的研究」)、2010年12月19日、東京大学駒場キャンパス
- ⑦ 楊海英 (大野旭)、中国文化大革命とモンゴル人大量虐殺運動—民族問題の本質—、長崎純心大学比較文化学科公開講座 (第4回地理歴史教育研修会・招待講演)、2010年11月20日、長崎歴史文化博物館
- ⑧ Yoichi Kibata, Two Island Empires Compared—Britain and Japan, The 4th Japanese-Korean Conference of British History, 2010年11月14日、熊本大学
- ⑨ Eisei Kurimoto, Limits of Humanitarianism during and Post-war Periods: The Growing Gap between Cosmopolitan and Local Orientations in Southern Sudan, Osaka University Forum “Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations”, 2010年9月28日、Groningen(The Netherlands)
- ⑩ 栗本英世、フィールドの人類学：スーダンでの出会いと国立大学における人類学

- の可能性、国際ワークショップ「モンゴルの環境問題と協力」、2010年9月5日、モンゴル国立大学 (モンゴル)
- ⑪ Yuji Ishida, 20 Jahre nach der Einheit: Zum Selbstbild des wiedervereinten Deutschland mit besonderer Rücksicht auf den Kontextwechsel des Holocaust, 韓国ドイツ史学会、2010年9月3日、ソウル大学 (韓国) (招待講演)
- ⑫ 川喜田敦子、難民入植地の遮断された記憶—第二次世界大戦後の東欧からのドイツ系移住者と「暴力」の記憶、日本西洋史学会、2009年6月14日、専修大学 (生田キャンパス)
- ⑬ 清水明子、「クロアチア独立国」における住民追放—ナチス・ドイツの広域秩序計画との接点—日本西洋史学会、2009年6月14日、専修大学 (生田キャンパス)
- ⑭ Atsuko Kawakita, German Reparation and Wiedergutmachung after World War II, Asian Association of World Historians, 2009年5月30日、大阪大学中之島センター
- ⑮ Yoichi Kibata, World/Global History from a Japanese Perspective, The 1st Congress of the Asian Association of World Historians, 2009年5月29日、大阪大学中之島センター
- ⑯ Yuji Ishida, Genocide, Genocide Prevention and Business, Todai Forum 2009 Human Security and Business: Focusing on Conflicts, Human Mobility and Governance, 2009年4月27日、ロンドン・シティ大学
- ⑰ Eisei Kurimoto, Various Trajectories of Development: Possible Scenarios in the Post-War Southern Sudan, International Conference “Reframing Development: Post-Development, Globalization, and the Human Condition”, 2009年4月9日、Osaka University

〔図書〕 (計 11 件)

- ① 石田勇治、勉誠出版、「ジェノサイド研究の課題と射程」石田勇治・武内進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、3-21
- ② 石田勇治、勉誠出版、「ナチ・ジェノサイドを支えた科学」石田勇治・武内進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、101-117
- ③ 楊海英 (大野旭)、風響社、モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 3—打倒ウランフー (烏蘭夫)、2011、1087
- ④ 廣瀬陽子、勉誠出版、「アゼルバイジャンジェノサイドの20世紀」石田勇治・武内

- 進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、195-224
- ⑤ 川喜田敦子、勉誠出版、「住民移動・民族浄化・ジェノサイド」、石田勇治・武内進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、119-139
- ⑥ 吉村貴之、勉誠出版、「“アルメニア人虐殺”をめぐる一考察」石田勇治・武内進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、165-194
- ⑦ 佐藤安信、勉誠出版、「ジェノサイド予防のための平和構築論」石田勇治・武内進一編『ジェノサイドと現代世界』、2011、417-440
- ⑧ 石田勇治、原書房、ジェーン・スプリンガー著『1冊で知る虐殺(ジェノサイド)』（石田勇治「解説 ジェノサイドへのアプローチ」）、2010、147-158
- ⑨ 楊海英(大野旭)、風響社、モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(2)－内モンゴル自治区の文化大革命 2、2010、818
- ⑩ 楊海英(大野旭)、岩波書店、墓標なき草原－内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録 上、2009、276
- ⑪ 楊海英(大野旭)、岩波書店、墓標なき草原－内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録 下、2009、289

[その他]

ホームページ等

<http://www.cgs.c.u-tokyo.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 勇治 (ISHIDA YUJI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30212898

(2) 研究分担者

木畑 洋一 (KIBATA YOICHI)
成城大学・法学部・教授
研究者番号：10012501

古矢 旬 (FURUYA JUN)
北海商科大学・商学部・教授
研究者番号：90091488

小長谷 有紀 (KONAGAYA YUKI)
国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
研究者番号：30188750

栗本 英世 (KURIMOTO EISEI)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：10192569

狐崎 知己 (KOZAKI TOMOMI)
専修大学・経済学部・教授
研究者番号：70234747

大野 旭(楊 海英) (OONO AKIRA)
静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40278651

平野 千果子 (HIRANO CHIKAKO)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00319419

佐藤 安信 (SATO YASUNOBU)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90313981

市野川 容孝 (ICHINOKAWA YASUTAKA)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30277727

廣瀬 陽子 (HOROSE YOKO)
慶應義塾大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：30348841

外村 大 (TONOMURA MASARU)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：40277801

川喜田 敦子 (KAWAKITA ATSUKO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：80396837

吉村 貴之 (YOSHIMURA TAKAYUKI)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：40401434

清水 明子 (SHIMIZU AKIKO)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号：60396950

亀山 洋子 (AKIYAMA YOKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・助教
研究者番号：10594236

武内 進一 (TAKEUCHI SHINICHI)
アジア経済研究所/JICA 研究所・研究員
研究者番号：60450459

福永 美和子 (FUKUNAGA MIWAKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員
研究者番号：50334305

(3) 連携研究者

黒木 英充 (KUROKI HIDEMITSU)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：20195580

(4) 研究協力者

増田 好純 (MASUDA YOSHIKUNI)
早稲田大学・人間科学学術院・助教
研究者番号：40586583

澤 正輝 (SAWA MASAKI)
早稲田大学・オープン教育センター
渡部 真由美 (WATABE MAYUMI)
東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程

クロス 京子 (CROSS KYOKO)
神戸大学・大学院法学研究科・博士課程

猪狩 弘美 (IGARI HIROMI)

桐朋学園大学・非常勤講師
シュテファン・ゼーベル (STEFAN
SÄBEL)
東京大学・大学院総合文化研究科・特任研
究員
